

---

# Start Line

TAKA

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Start Line

### 【Nコード】

N83260

### 【作者名】

TAKA

### 【あらすじ】

学校を寝坊してサボった主人公高橋春哉と同じく学校をサボった女子野口美崎この二人が偶然出会い、春哉の心は少しずつ変わっていく

…

## 一話【偶然の出会い】（前書き）

初めての恋愛小説です！暇つぶし程度に見ていって下さい！

## 一話【偶然の出会い】

俺が今、ここに立って居られるのは…  
あの桜の花びらが舞い落ちる桜並木の中で…

あの日…「君」と出会えたからだ。

「春哉ー！！朝よー！！起きなさい！！」  
母親の声が一階から響いて来る…。ポーとしていた意識が段々ハッキリして来た。

「まだ8時じゃねえか…」  
ゆっくりと重い体を起こして時計を見た。  
中学までは8時10分位まで寝てもオツケーだったけど今月俺は高校生になった。高校は家から遠くいつも早起きしなければいけない。

ええつと…あと何分寝れつるけ…ええつと…8時！？  
「嘘っ！！遅刻する！！」

飛び跳ねて起き上がり俺はいくつもの準備を同時に行った。

「春哉？朝ごはんは？」

「いらねーよ！！」

朝ごはんなんて食べてたら100%遅刻から150%遅刻になるつーの！！…ただ母さんは呑気なんだよ…。

ちよくちよく母さんに八つ当たりしながら淡々と準備を進めて俺は勢い良く扉を開けて駆け出した。

「行つてきます！！」

ハア… ハア… ハア…。

電車30分バス15分徒歩15分…急いで来たけど8時30分集合で今9時32分か…。やっぱり家から学校離れてると不便だ…。怒られんの嫌だなあ…。あーあ…嫌だなあ…。

よし!!サボろう!

そうと決まれば、何処で時間潰そっかなあー。

…つてかまず学校に連絡か!!

俺は母さんに新しく買ってもらったばかりのケータイを開けた。

子どものために買ったケータイの最初の使い道がサボりの工作とは

…。親不孝な息子だなあ…。

…。ああ…もう知らん!!掛ける!!

ブルルルル… プルルルル…

「はい?桜庭高校です」

…。お。まだ高校入学したばかりで知らない先生ばかりだがこの先生は知ってるぞ。

たしか永緒恵子…先生。通称怒らない先生。まあ、そのまんまやな。なんて考えてる間に向こうに気づかれた。

「あ、もしかして春哉君?」

この先生はエスパーかっ!!なんて突っ込める訳も無く冷静に言葉を返した。

「あっ、はい。そうです」

ああやっぱり!!みたいな動きをしているのは電話でも分かった。

「もう。連絡来ないんで心配してたんですよ？」

よし怒られる雰囲気じゃ無い…。

「すいません…。ちよっと熱があつて…ゴホン…！」  
ピンピンしてるけどな。

「あらそうなの。連絡遅れたのはきつくて寝てたからかしら？」

「あ、そうです」

ピンピンしてるけどな。

次からもっと早く連絡してね的な事を言われて会話は終わった…。

なんつーか……………騙しやすい。

さつてと…カラオケでも行くか。

俺は先生に見つからないように人があまり通らない狭い桜が並ぶ通りを通つて帰る事にした。

カラオケで何歌おうかなあ…やっぱone wayは必要でしょ。

それと、あと…………

「つきや！？」

「っ痛え！？」

前を見て無かつたせいで誰かにぶつかってしまった…。

「あ、すいません。大丈夫ですか…？」

俺にぶつかつて倒れたのは桜庭高校の制服を着た女子生徒だった…。

あの鞆は一年生…。俺と同じ年か。…………つてこの人も学校サボり！？

「あ…見つかつちやた…」

女子生徒はゆっくり体を起こしてにっこり笑つた。

「あ…ええつと…君サボり？」

俺女子と話すの苦手なんだよなあ…。なんかキャラちよつと変わるし。

「まあそんなとこ。これからカラオケにでもいこーかななんて思つてた所かな」

こいつもカラオケかい。

「そ、そっか。君は…」

君は何処のクラス？って聞こうと思ったら割りこまれた。

「君じゃなくて私は野口美崎ね。」

「あ、俺は、高橋春哉…」

それにしてもすごい美人…いや、可愛い系？どっちだろ。

「たしか同じクラスだったよね」

え？嘘！？こんな美人。可愛い人いたっけ！？

「あえ…？あ、うん」

情けない返事してしまった。ダセーな俺。

「サボってた事誰にもいわないでよねー？」

顔を近づけて聞いてきた。うわーあ…学校でモテてる女子が明日から全部ブスに見えるかも…。あ、とりあえず答えないと。

「言わないよ」

「えーどうかなー本当かなあ？」

なかなか野口は信じてくれない。

「あ、いい事思いついた！」

野口はポンと手を叩いて言った。

「高橋くんもカラオケ一緒に行こうよ！そーしたら共犯でチクれないでしょ？」

マジで？女子とカラオケとか。俺歌えないと思う。

「いや、でも…」

もう決まった事のように野口は俺の手を引っ張って来た。おいおいおいまだ心の準備が…。

「さあ行こうかー」

…こうして強引に俺はカラオケに連れて行かれてしまった。

「どっちから歌う？」

野口は俺に聞いてきた。俺から歌えるわけねえじゃん。

「お先にどうぞ」

野口はマイクをクルクルさせて立ち上がった。うわマイク回すのうまつ。て、どうでもいいか。

「んじゃ、軽くone wayでも歌いマース！」

あー俺歌いたかった……てか俺と同じアーティスト好きなんだな。

ジャーン！！

「ふう……。」

演奏が終わった後演奏中とは対象に室内は異常に静まりかえった。

………う、うそ………上手すぎだろ……いやマジでうまいって！！

「お前上手すぎだろ……！」

ついそう大きな声で言ってしまった。実際……ナルシじゃないけど、俺は結構歌に自信があった。

けど野口の声聞いたら……なんか自信なくなった。

「いやいやいや、上手くないって！」

野口はそう言ってきた。といいつつのその笑顔なんとかしろ。おい。

「いやいやいや、お前が上手くなかったら俺は何だよ!？」

「まだ知らないもーん。高橋くんの声聞いてないからー。」

「よし！歌ってやる……！」

ジャーン！！

「ゴホッ！！ゴホッ！！張り切りすぎたあ……。」「  
どっかであったようにまた室内は静まりかえった。

「上手すぎ！！！」

興奮した様子で野口が肩に手をおいて言ってきた。

「いやいやいや、上手くないって！」

そんな事いっても喜びは隠しきれないよね。

「いやいやいや、高橋くんが上手くなかったら私は何だー？ってこれ前にもあったような……。」「

歌ほめてもらえたのも嬉しいけど今一番嬉しいのは…俺。女子の前で普通に歌えて普通に話せてる。

そんな事を考えてた時いきなり野口から切り出された。

「あのさ、もう堅っ苦しいから春哉ってよんでもいい？」

あんま名前と呼ばれるの好きじゃないんだけどこいつならいいって思う。でも、なんか不平等……。 「春哉！」 「野口！」 って呼び合うのおかしくね？あ、それじゃ……

「それじゃ平等じゃねーから俺も美崎って呼ぶよ？」

野：美崎はにっこり笑って言った。

「オツケー！いいよ！春哉！」

「照れるな！美崎！」

「春哉！」

「美崎！」

…なんかウケる。

「じゃ次は私が歌うね！！！」

「ふー…。歌ったあ…」

朝から夜までぶっちぎりで計12時間歌ってた。喉いてー。

「明日学校で会ったら私、ハスキーボイスかも」

「いや…俺明日、ミドルボイスかも」

「それは、きもいでしょ（笑）」

そんな何気ない？会話をしながら俺らはカラオケ店を出た。

「あ、家送るよ」

「いいよ、いいよ。家近いし」

「そっか？じゃあまた明日学校でな」

「じゃあね」

…俺は光がちりばめられた夜空のしたを歩いてた。

たくさん不安のあった高校生活。少しづつだけど不安はなくなり…

今は、明日が楽しみで仕方ない。

「こんな日が毎日おくれますよーに」  
自分でも分からない何かに祈って俺は家への道を早歩きで帰ることにした…。

…続く

一話【偶然の出会い】（後書き）

もしよろしければ感想をください！

## 二話【再会と夢】

ピピピッ …… ピピピッ …… ピピピッ

眩しい朝日がカーテンの隙間から差ししてくる…。段々意識がハッキリしてくると同時に昨日の記憶がよみがえる…。

「ん…喉はもう痛くないな…」

ゆっくり起き上がってベッドのすぐ側にある窓から外を見た。

「今日はゆつたりしていいな。」

たしか今…… 8時だから…あと…

8時じゃん！！

「嘘！？遅刻する！！」

ああ……どうして俺は寝坊ばかり…。

……あ、いいこと思いついた。

「はい、そうです」

「そう、じゃあ今日は少し遅れて来るのね」

ふう……無意識にため息がでる…。やっぱ永緒先生騙しやすかった。

病院行くから遅れるって言ったら理由聞かずに信じるし…。通称都合のいい女だな…。

別に学校サボってもよかったんだけど美崎と「じゃあまた明日」って言っちゃったし。…よし！今日は久しぶりにゆっくり準備するか。

「行ってきまーす」

今日母さんは仕事で居ねーんだけどなんか癖で言ってしまう。髪形バッチリにセットして今日は登校。

「ドアが閉まりますご注意ください」

ふう…。何とか電車には間に合った。電車はいい。色んな考え事を誰にも邪魔されずに出来る。もっとも俺に考え事なんて特にねーけど。

「あれ？春哉じゃん」

電車はいい。とか意味不明なこと詩人氣取りで呟いてたら前から声が聞こえてきた。

「お？リクじゃん」

前方には俺の中学からの親友の山本リク（やまもと りく）がいた。

「お前学校は？」

リクに不気味なものを見る目で聞かれた。まあ…昨日もサボってたし無理ねーけど。

「寝坊して病院って事にして今登校だよ」

それを聞くと同時にリクは吹きながら言った。

「お前ホントアホだなー！！」

つうー！！この俺の現状って周りから見るとアホなんだ…。

「うるせーよ。ってかお前はなんで学校行ってねーんだよ？」

リクは誇らしげに目をつぶって言った。

「寝坊して病院って事にして今登校だよ」

ってこいつもかい！！

「なんだよ！お前も同じじゃん！」

リクはチツチツチとベタに指を動かした。

「ちげーよ。寝坊した理由がちげーよ」

どうせしようもない事だろっけど聞いてやるか。

「何だよ」

リクはまたまた誇らしげに言った。



何…って言われても特には…とはもう言えねえし。何て言おうか。そう考えた瞬間に昨日のカラオケが頭に浮かんだ。

「ボ、ボーカルだよ」

リクのその時の表情は傑作だった。

「っちえ！！お前もちゃんとやることやってんのな」

いや、やってねーけどさ。

「当たり前じゃん暇人じゃねーんだし」

いや、暇人だけどさ。

「やっぱ何かに熱中するって楽しいよな？」

いや、知らねえけどさ。

「ああ、最高だぜ」

いや、こんな嘘ついてる俺最低だけどさ。

もう…嘘でした。なんて引き返せないことは少し感ずいていた。

「よーし！ついた！」

嘘とか嘘とか嘘とか話してる間にここ、桜庭高校についていた。

準備とかなんとかいって遅れたせいで実際のところ高校は昼休みあたりの時間になっていた。

ガララ…

怒られないためにドアゆっくりと開けて教室内を確認する。

「よし先生はいない」

一人でそう呟き俺は教室に入った。

ちなみにリクとはクラスは別で久しぶりに話した気がする。

その時、

「遅い！！」

誰が後ろから怒鳴ってきた！！やっべ！！先生か！？

「なんだよ…」

緊張が解けて一気に安心感が俺をつつんだ。

「美崎かよ」

そこには昨日仲良くなった？美崎がたっていた。

「またサボりかと思っただよ」

美崎は呆れた様子で言ってきた。

「まあサボりみたいなものだけどな」

「つてか!!」

「美崎今日も綺麗じゃん」

ザワツつと周りが騒ぐのが分かった。何こそつと聞いて勝手に騒いでんだ？

「え…？あ、えと…」

美崎もなぜか赤くなってる…。俺なんか言っただけ？うん！焦がしたい！つて言つて。うんこがしたい！に聞こえたとか。いやそんな事言つた覚えねーけど。

「どした？綺麗つて言っただけで……………あ!!」  
「ヤバイ誤解された！」

「違う!!違う!!声!!声!!昨日ハスキーボイスとか言つてた  
くせに今日も声綺麗じゃん!つて事!!」

美崎もああね。みたいな顔して言ってきた。

「あ、そう言うことね。…つて紛らわしいよ!!」

「いつてええ!!背中ビントは痛いよ!!美崎さん!!」

…ふう…。周りで騒いでた奴らもいつの間にかいなくなってる。安心したんだか残念なんだかわかんない表情でどっか行つた…。

キーンコーンカーンコーン

「おーい授業始めるぞー」

先生が教室に入つて来た。

「それじゃあ教科書の…ん？あれ？春哉お前来てたのか!？」

あ、ヤバ…

「来たんならちゃんと職員室に行つて」

ガミガミガミガミ…

…って結局怒られてんじゃん俺…。

「災難だったねえ春哉」

五時間目が終わりやつと先生の説教から開放された俺に美崎は声をかけてきた。

「災難どころじゃねえよ、もういろいろいわれて頭パンクしそう…」

「遅刻するからだよ」

「それさつき先生にも言われた…」

「災難だったね！」

「それさつき美崎って人にも言われた…」

「あれ？そうだったけ？」

美崎との会話って周りから見たら馬鹿らしかったりするかもしれないけどなんだかテンポがよくって気に入ってる。

「あ、そういえばさ」

美崎が言ってきた。

「さつき山本って人に春哉の声についてめっちゃ聞かれた」

…え！？嘘！？めっちゃくちゃ嫌な予感がした。

まさかボーカルやってるとか学校中に広めたりしてねえよなリク…。

「春哉ってボーカルしてたんだね」

クソリクゴリアアアアアア！！ってめ！！バレまくりまくりですけど！？

「あ、いやーボーカルってのは…なんつーか」

とっさに言い訳思いうかばねえ！！

「いやーやっぱり普通の人にしては歌上手すぎると思ったよ！！いや

「つぱりそーだったのかあ!!」

美崎…納得しないで嘘だから…。

「それでその人放課後音楽室に来いってさ」

「…あの馬鹿リク!!」

俺は一目散に音楽室に向かって走り出した。

「… だったら来いってよー!？」

後ろで美崎が叫んでたけどよく聞こえなかった。とりあえず「わかった」的なデスチャーをして流した。

ハア… ハア… ハア…

ようやく音楽室についた。こんだけ全力で走ったのいつ以来だろ…。

それよりもリク!!あの馬鹿!!

俺は勢い良くドアをあけてさげんだ。

「おい!!リク」

テメエいいふらしてんじゃねえよ!!って言おうとした瞬間リクに握手された。

「来たか!!春哉!!待ってたんだぜ!？」

……は？

「バンド…やろっぜ!!!!」

…はああああ!!!!???

続く…

### 三話【バンド結成】

「来たか！春哉！待ってたんだぜ！？」

……は？

「バンド…やるうぜー！！」

…はああああ！！！！？？

「いやいやいや…は？」

俺が「よっしゃー！！やるうぜー！！」とか言つと思つた？意味わかんねーよ。

「よっし！！これでボーカル決定な！！」

「いやいやいや…は？」

「あとベースとドラムが欲しいな…できればもう一人ボーカルとか…」

「いやいやいや…は？」

「どうやって勧誘する？」

「いやいやいや…は？」

「いやいやいや…は？」

「真似すんなクソリクー！！」

意味わかんねー…とりあえず状況を把握しよう…。

まずリクに嘘ついて…美崎からリクの話聞いて…音楽室に来たら…  
「バンド…やるうぜー！！」

意味わかんねー！！！！

「なんなんだよお前？」

俺はキレ気味な表情で言った。とりあえずリクを黙らせるつもりで…。

それに対してリクはすんなりと表情一つ変えずに言った。

「いや、ボーカルするんでしょ？」

「…は？」

「だ〜か〜ら〜！！ボーカルするなら音楽室来いって伝言した残したじゃん！！」

「…あ…」

俺が走ってる途中に美崎が言ったことってそのことだったのか…。

「あ、えーと…」

美崎がちゃんと伝えてなかったってなるの嫌だし俺がアホになるのもいやだし…どうしよ。

そのその時、音楽室のドアが開いた。

「春哉ー？」

何故か美崎が音楽室に来た。俺は美崎に声をかけた。

「美崎？どうした？」

美崎は俺を見つけると安心したような表情でこっちに駆け寄ってきた。

「さつき最後いった事ホントに聞こえてたのか確認しようと思って…なんか適当に流したって感じだったじゃん」

あー…ばれてたか。

「あ、ああ…実際聞こえてなかった。てか今、知った」

リクはそれを聞くと驚いた様子で話しかけてきた。

「は？じゃあお前ボーカルやりたくねーの？」

うーん…。別にやりたくない…って訳じゃないんだけど。

その時放課後に本来音楽室を使う吹奏楽部の女子達が大勢入って来た。

ヤバイ…ボーカルがどうか女子に聞かれまくるじゃん。

「リク、いったん場所移そうぜ」

そんな俺の心とは裏腹にリクは大声で頼んできた。

「たのむ！！お前しかいねーんだ！！お前のその美声をわがバンドに！！！」

クソリクゴリアアアアア！！！！！！つてめ！！聞かれまくりまくりですけど！？

最悪なことに俺の不安は的中し吹奏楽部の一人が声かけてきた。

「えー？高橋って歌うまいの！？」

そして他の部員たちもうわさしはじめた。

「えー？下手そうだよ」

「顔が下手そう」

「絶対下手だよ」

「プ キュアとか歌ったりして」

やめるやめるやめる！！！！！！勝手な想像で人の歌唱力決めんな！！！！あとプ キュアとか歌わん！！！！

ボロクソ言われて傷つき始めた俺に対してリクが言ってきた。

「悔しくねーのかよ？」

……そりゃ悔しいに決まってる。てかお前のせいだよ。

「あたりまえだよ」

その言葉に対してリクがガッツポーズしてきた。

「ギャフンと言わせてやろうぜ！！」

ここで歌えってか！？無理無理無理！！女子の前で歌うなんて…。美崎が心配した様子でこっちをみている。

「美崎……」

このまま終わったら俺チヨーかつこ悪いよな。でも、女子の前では……。

いや、歌えるじゃねーか…美崎とカラオケいった時も歌えないと思っていただけ歌えた…。こんな格好悪く終われねーよな。やっぱ。

「リク、歌うよ…ギヤフンといわせてやるよ」

リクは興奮して肩を組んできた！！

「それでこそ血を分けた兄弟！！！」

「わけてねーよ」

「嘘？マジで歌うの？」

吹奏楽の奴らも俺の「歌ってやるよ」の言葉に驚いていた。

「リク行くぜ…」

「おう」

「んじゃ…一番得意なあれ歌うよ。リクギターひけただろあの歌」

「当たり前だろ」

リクのギターの前奏が始まった。

ふうー…こんな格好悪く終われねーよ。

歌は…俺の唯一の取り柄なんだから！！！！

歌がついにはじまった。全てがスローモーションに感じた。

この歌はなんだか俺の心に響いた。

だんだん興奮していく女子達の顔をみて「なんなんだろうこの気持ち…」そう思ったときにさらに盛り上がるサビ。

歌って…こんなに楽しいものだったんだな。

誰かに喜んで貰うってこんなに嬉しい事だったんだな。

目立つ事はあまり好きでは無かった俺がいま大勢の前で歌ってる…。

……なんだろうこの気持ち……。

ジャンーン!!

リクのギターで歌は終わった。…だいぶアレンジしやがって。

「最高!!」

歌が終わっても吹奏楽部達の興奮はおさまらなかった。

「高橋かつこいい!!」

「天才!!」

「私惚れたかも」

「私も」

「もう今すぐ告りたいくらい!!」

なんだよ…なんなんだよボーカルって。

最高じゃねーか!!!

「リク!!俺ボーカルするよ!!」

俺は今の気持ちを大声で言った。

「その言葉を待ってたぜ」

リクはその一言しか言わなかった。リク…なんかめっちゃ格好良く見える…。

「ありがとなリク」

いつつもはうざったらしいリクも今日は心から親友と思える…。自然と感謝の言葉が出た。

「ま、こういう結果になる為にわざと大声で吹奏楽部の女子の前でお前をお願いしたからな。もっと感謝しろよ」

……。

「ん？どうした？感動して声も出ないか？」

「死ね！！」

「イテエ！！」

思いつきり拳骨してやった。

… 仕組みれてたとしてもあの時感じた気持ちは本物なんだよな。やっぱ「ありがとう」… そう心で呟いた。

「よし！！じゃああと女ボーカル一人だな」

頭にたんこぶがあるリクがギターをケースに入れながら言った。

「え…？一人でよくね？」

「いや、先生と相談してさ学園祭の時コンサートできるようにしたんだよ」

「マジか！！よくギターしかいない状態でコンサート申し出たな。ってかそれとボーカルもう一人なんの関係が？」

「メンバーが男ばっかだと女子が来てくれないだろ。だから女ボーカルが欲しいの。そしたら男女どっちも来てくれる」

頭にたんこぶがあるリクも色々考えてんのな…。別にボーカル一人でも珍しがってみんな来ると思うけどせっかく頭にたんこぶがあるリクが考えたんだ。その案に乗ってやるう。

「なあなあ」

頭にたんこぶがあるリクがこそこそ話に近い声で言ってきた。

「野口ってさ、歌うまいわけ？」

「めっちゃ上手い天才だよ。…で、なんでそんな事聞くの？まさか好きとか！？」

リクはなんかキラキラした顔で言ってきた。

「いやいや、野口って超可愛くて美人じゃん！！だからあの人がボーカルだったらすごい人気なると思うんだよ！！」

「ふーん…そうか。って！！美崎もさそうの！？」

「当たり前じゃん」

当たり前前のように言いやがって…。

いやじゃないけど「バンドしようぜ！！」なんてなんか恥ずかしく言えないな。

まあ取り敢えず美崎と何か話すか。どう切り出すかは考えてないけど。

「春哉マジで歌っちゃったね」

こつちが話しかけようとしたら逆に話しかけられてしまった。

「うん？…まあね」

美崎のおかげだよ…とはちょっといえない。

「バンドのボーカルするんだね」

「うん」

どう切り出そうか考えていたときいきなりリクが美崎の話かけた。

「ねえねえ、野口もバンドのボーカルしてくれよ」

野口はリクを二度見した。

「うそ…入っていいの？」

まるで入りたかったような口ぶり…。

「俺のテストに合格したらな」

リクがいきなり意味不明なこと言った。すかさず俺はリクに聞いた。

「ちよつと待てよ。テストってなんだよ？」

「これからカラオケいって野口の歌唱力をチェックする」

おいおいおい…入っていってテストって、なんなんだよ。美崎絶対イラつと来てるだろ。…俺は美崎の方を恐る恐る見た。

「喜んで！！テスト受けさせてください！！」

って、いいんかい！！

「さっそくカラオケだぁ！！」

まったく…変なバンドに入っちまった…。

「合格です」

美崎の歌の後リクは美崎に土下座してそう言った。

こうして俺らのバンドは取り敢えずボーカルが俺と美崎に決定した。

続く…

## 四話【リクの初恋】

「よっしゃーついにバンド結成だな!!」

美崎テストカラオケの帰り道に俺は背伸びして言った。

「うん!!」

美崎も笑顔で言葉を返してきた。…相当嬉しいらしいな。  
今の美崎の表情なんか無邪気な子供みたいで可愛い…。

「あのさー」

リクが話題転換するつもりか話掛けて来た。

「どうした？リク？」

「俺さつき好きな人出来ちゃったんだよね」

………はい？

「は？え？」

美崎も半端無い驚き方している…。…というか言葉話せてねえよ美崎  
…。

ここは俺が追求しなければ!!

「だれだよ？」

リクは俺の「だれだよ？」の言葉を聞くと同時にその人のことを思い出したのかおやつを目の前にした子供の様な表情で言った。

「桜井姫香だよさくらい ひめか」

……誰だっけ？

「さつきカラオケに居たんだよ。そしてよおたまたま目が合ったんだよ。そしたらよお少し笑って赤くなって目を逸らしたんだよ……」

ふーん……………終わり!?

「それだけ!？」

リクはもうヨダレが出そうな顔で言った。

「超可愛かったあ……………」

まあ目が合った後に赤くなられて目を逸らされるとキュンっとなるのは分かるけど……。それだけで惚れるか？

「話した事あんの?」

俺はリクに聞いてみた。答えは分かっているけど。

「ナツスイング」

やっぱり……。こいつ中学のときから何か特別な理由が無い限り絶対女子と話さなかったからな。

中学のとき俺が女子と話さない理由聞いたら「話題合わない上に陰口多い。見ていてムカつくから女とは話さない」と言われた。

だから美崎からリクに俺の声のこと聞かれたって言われたとき嫌な予感がしたんだよな。

「……あのー」

ずっと黙っていた美崎が口を開いた。

「どうした野口?」

リクが美崎に聞いた。

「姫香なら私の親友なんだけど……」

「ええええ!!???」

つい大声を出してしまった!!すごい偶然だよ。

「決まり!!!俺の初恋を手伝ってください野口様!!!」

なんだかすごい事になってきてしまった。

「てか手伝うって具体的に何をすんだよ？」

リクがしばらく考えて口を開いた。

「うーん…とりあえずデートしたい」

オイイイ！！とりあえずデートってなんだよ！！

「無理だろ絶対！！なあ美崎？」

美崎はにっこり笑って言った。

「ん？OKだよ？」

なーんだOKじゃん…。

「…つて、ええ！？」

美崎は肩に手をおいて言ってきた。てかめっちゃ近いよ美崎…。

「私に考えがあるの…」

やばい…こんなに近づかれたら何か緊張するって！！

美崎は俺の胸ポケットに何かを入れた。

これなに？つて聞こうとした俺に対して美崎はシーッと指を唇の前に置きさらに近づいて小声で言った。

「それ私のメアドね…。山本に内緒で話があるから今夜メールして」

その時、いきなりリクが俺と美崎の間に入って来た。

「おい？OKって言ったあと抱き合ってたにやっつてんだ？」

美崎はみるみる赤くなって言った。

「だ、抱き合ってたないって！！」

美崎すげー赤くなってる…でもそれ以上に俺赤くなってると思う…。

本当に抱きつかれた様な感じだったし…。女子とあそこまで至近距離で話したのは初めてだったから…。

てかやべえ！！思い出したらまた緊張してきた。心臓の音ってこんなに大きくなるもんなんだ…。お、俺も抱き合ってたないって言わなきゃ。

「だ、だきあ、あつてないってつて」

ああ…緊張しすぎて変な事言っちゃったよ。

「なにいつてんだよ春哉？」

「あ、いやべちゅに…」

「なんだよべちゅにつて！！マジうける！！」  
もうダメ…しばらく俺、言葉喋れない。

「と、とにかく！！私に任せて！！今日金曜日だから月曜までに話  
つけとくから！！」

美崎頼もしすぎ…。

「お、マジで！？」

り、リク嬉しそう…。てかまだ緊張してね？俺。

「す、すご、ごいな美崎」

だああああ！！まだ喋れなかった俺！！早く心臓おさまれ！！

「ただいまー」

やっと心臓もおさまり家に無事帰ることが出来た。

「あら春哉おかえり」

今日は母さんは家にいるらしいな。

「メシまで部屋いるから」

俺はそう母さんにいつて二階上がった。ホントは今日バンド始め  
たんだけ！！いいだろ！！ってテンションなんだけど。

「今日は本当にいろいろあったな…」

バンドも結成出来たしリクの好きな人も聞けたし…。

「まだ実際バンドは活動してねーし暇だ。結局」

一人でぶつぶつ呟いていた。

「音楽聴いていよ」

俺は好きなバンドのCDを棚からだし流した。

.....

「ただいまー」

野口と書かれた表札がついているドアをあけて私は言った。

私は今一人暮らしなんだけど中学のときの癖で言ってしまう。

中学までは東京に居ただけで高校になったときに引っ越して一人暮らし。もう不安ばっかで困る……。

「春哉いつメールするかな」

私って春哉には自分でもビックリするぐらい大胆になる……。今思えばメアドわたす行為自体が緊張はずなんだけど……。

初めて会ったときもそう、男子とカラオケなんて絶対無理なはずだったのに……。あれはいろいろ理由があっただけだ。

「バンドはいれてよかった……」

ベットにねっころがったあとに天井に向かって言った。

「ホントはバンドのボーカルずっとしたかったんだよね……私」

何か考えごとをしているときってホント私一人言おおいな……。

私は起き上がっていつもやっている事をして再びベットに入った。

「早くメール来ないかな……」

クッションに抱きついてしばらく目を閉じた。

「はやくメールしてよ……春哉」

「ー！？」

「春哉ー！？」

母さんの声が一階から響いて来る…。あー…寝てたっぽい。

「ご飯よー？」

もうそんな時間か。微妙な時間に寝ると妙に体がダルくなるな。

「分かったー！！」

大きな声で一階に向かって声を出した。うっわ…寝起き声低っ…。

美崎と初めて会ったときのカラオケでは良く声出てたな。

…あの時美崎に出会えて良かった…。美崎のおかげでバンドにも入れたし。毎日が楽しくなった。

あ、そういえばメアド！！美崎にあの時胸ポケットに紙入れられたんだった。

「これが美崎のメアドか」

俺がもってるメアドは男子のばっか…。女子のもいくつか形としてもってるがメールはしていない。

ちゃんと女子にメールするのって美崎が始めてか…。

「なんか緊張してきた」

ゆっくりとメールを入力する…。

「話って何？」

メールを入力し終わった後またうつぶせに寝っころがる…。

「なんかまた眠…」

……

「マ、マタタビ!!!」

変な夢を見ていた俺は勢いよく起き上がった。美崎の返信を待つている間にまた寝ていたらしい。

「うわー絶対返信来なくて美崎怒ってる!!!」

恐る恐るケータイの受信ボックスを開いた。

「あれ？メールの着信時間が今とあんま変わらねーけど……」  
タイトルごめんだし…メールを開いてみよ。

メールの内容はこうだった。

「ごめん!!!返信遅れて!!!寝てた(^^)」

このメールを見た途端安心した。

「美崎も寝てたのか…よかった怒られなくて……」

返信しよ…。とりあえずこう返した。

「いや、俺も寝てたし(笑)てか話つてなに？さつきも言ったけど」  
次は寝ないようになくちゃ…。次はお互い様ってことはねえんだ  
からな俺!!!

いつも君がくれたー 笑顔でー 少し強くなれたー

携帯がなってる。返信はやっ!そして着信音はず!!!あとでかえと  
こ…。

俺は返信されたメールを開いた。

「ん、実はね…姫香ってリクのこと好きなんだよ」

ええええええ!!!??マジで!?

続く…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8326o/>

---

Start Line

2010年11月17日18時27分発行